

天和検地（1682年）にみる「山畑」と焼畑

米家 泰作

1. はじめに

糸魚川市の東部・旧能生町域の各地区には、江戸幕府が実施した1682（天和2）年の検地帳が伝わり、『越後国頸城郡能生町御検地水帳』に翻刻されている（能生町史編さん委員会編1982, 1983a, 1983b, 1983c, 1984a, 1984b, 1986a）。各検地帳の後尾には多数の「山畑」が記載されており、筆者はこれが焼畑とかかわる可能性について、以前より関心をもっていた。というのも、近世の検地における「山畑」は、焼畑を含む土地利用として中世から継承された地目であり、17世紀後半には検地における焼畑への関心が強まったことが知られるからである（米家2019:98-181）。糸魚川市を訪問した機会に、当地域の天和検地の「山畑」について、不十分ながら検討することができたので、ここに報告したい。

2. 糸魚川市域の焼畑慣行

図1が示すように、1950年の世界農業センサスでは、新潟県西頸城郡に焼畑・切替畑の面積136.99町、農家世帯数2,134戸が記録されている（農林省統計調査部1955）。同郡内の上早川村（49.7町、474戸）、能生谷村（24.28町、577戸）、小滝村（21.06町、208戸）、青海町（10.39町、232戸）では、その面積が10町以上に達していた。いずれも、現在の糸魚川市域に含まれる町村である。佐々木高明は8か所の焼畑卓越地域卓のひとつ、飛能越山地の一角に西頸城郡を位置づけており、上記4村の農家に占める焼畑農家率の高さ（上早川村58.4%、能生谷村43.1%、小滝村92.0%、青海町66.6%）を特筆している（佐々木1972:35）。

しかしながら、『糸魚川市史』や『能生町史』の民俗編、ならびに一部の民俗調査報告は焼畑への言及に乏しい（糸魚川市役所編1987:民俗編14-16、能生町史編さん委員会編1986b:下巻295-298、成城大学民俗学研究会1980）。ただし『市史』に抄録された県立糸魚川高校郷土部のレポートには、廃村となった梶山集落（旧小滝村東部）の古老による焼畑の回顧が含まれている。

「昔ヒエやフワを栽培して食べた。（中略）ヒエやアワは焼畑で栽培した。焼畑には最初カブを植えた。その後にアワやヒエを作った。二年程自分が旅に行って帰ってきたら、ヒエやアワのご飯がでないので、自分を久しぶりに帰ったので歓迎してくれていると思って喜んでいたが、いつまでも米のご飯が出るのでおかしいと思って聞いたら、ヒエやアワは作らなくなったと聞かされ驚いた。その後まもなくヒエやアワの種すらなくなった。飢饉が来たらどうなるんだろうか」（糸魚川市役所編1987:民俗編115-116）。

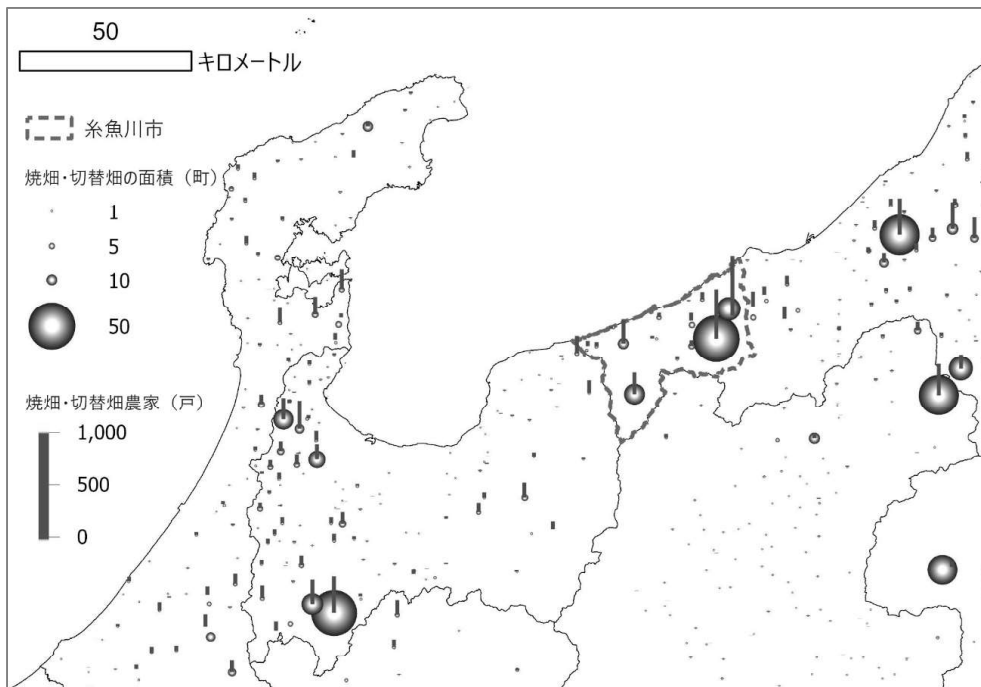


図1 世界農業センサスにみる焼畑・切替畑の面積 (1950年)

全国については米家(2022)を参照。農林省統計調査部(1955)と国土数値情報により筆者作成。

話者が焼畑の消滅に直面した時期は明記されていないが、20世紀半ばまで焼畑農家率が高かったことを踏まえれば、1950年代から1960年代のことであろうか。『糸魚川市史』や『能生町史』が編纂された頃には、すでに焼畑が途絶して30年ほどが経過し、民俗調査の焦点にならなかったとみられる。

上述の世界農業センサスが示す焼畑の分布については、第二次世界大戦後の食糧難の時期に焼畑が一時的に拡大したという見方もある。しかし、1881(明治14)年の田麦平村(糸魚川市南東部)の皇国地誌は、明治期の地籍調査にもとづく面積として、21.7町、畑0.5町のほかに、「切替畑」11.0町が記されている(上能生郷土誌編集委員会2018:120)。切替畑は、世界農業センサスで焼畑と併記されたように、焼畑的な土地利用を意味する語彙の一つであり、土地の休閑と輪換を強調した呼称である。本研究では、切替畑もまた広義の焼畑に含まれるものであり、奥地山村で営まれていた「本格的」な焼畑だけでなく、休閑と輪換が速い焼畑も含まれると理解しておく。以下では、糸魚川市域において近代に焼畑が営まれていたことを踏まえて、天和検地の「山畑」を検討していこう。

3. 天和検地帳における「山畑」の特徴

糸魚川市域における1682(天和2)の天和検地は、松平光長(結城秀康の孫)の越後高田

藩が1681(延宝9)年に改易され、藩領が幕府領となった機会に実施された。1685年(貞享2)には稲葉正住が移封されて越後高田藩が復活し、天和検地は以降の高田藩政の基盤となった。検地に際しては、田畑ともに5段階(上々・上・中・下・下々)の等級を付け、さらに砂田・萱生田・山田、山畑・切替畑などが検地された(松永1980, 新潟県編1987:215)。その検地条目(「検地条目並びに同伺い」)には、

一 新田又者起帰り之地、下々と仕候而も、石盛つりあい不申地可有之と奉存候、左様之地、石盛ニ而用捨可仕候哉、又ハ竿先ニ而心得可仕候哉と、伺

御返答 下々畑ニ茂取会不申悪敷地、盛見計ひ次第下ケ可申、肩書ニ山畑或ハ河原畑、水付畑等と記可申候、(新潟県編1981:294。下線は筆者)

とあり、下々畑より下位の地目として「山畑」を設ける指針があったことが確認される。地筆の記載例として、後述する柵口村検地帳の196筆目を例として挙げる(能生町史編さん委員会編1983a:85)。

大そうれ
山畑

六間
式間

拾貳歩

長兵衛

天和検地を先行する検地と比較すれば、16世紀末に慶長検地が行われているが、翻刻されている検地帳の本文には「山畑」を記したものはみあたらない。1598(慶長3)年「西塚村慶長御検地帳」の末尾には、「右之外」として「山島 三段斗 御座候」との記載があり、慶長検地では「山島」が検地対象外であったことが窺われる(糸魚川市役所編1986:4)。

『糸魚川市史』は天和検地における各村の石盛を表にまとめている。それによれば、旧能生町合併前の旧糸魚川市域35か村のうち、およそ4分の3の村に「山畑」があった(斗代は全て1反あたり1斗。糸魚川市役所編1977:220)。また、『越後国頸城郡能生町御検地水帳』によれば、旧能生町域のほとんどの村に「山畑」がみられた(斗代は同じく1斗)。各地目の面積を図示した図2によれば、「山畑」の面積比にはかなりの地域差があり、海岸に近い村であっても平地が少ないところでは広大な「山畑」が検地された例もあった。「山畑」面積が特に多い村としては、木浦村(60.1町)、小見村(31.3町)、徳合村(20.8町)、能生町(18.3町)が挙げられる。また面積は広大でなくとも、耕地面積の4割以上が「山畑」であった例として、太平寺村、寺山村、鬼伏村、楨村、谷内村、仙納村があった。

これらの「山畑」の実態に関して『糸魚川市史』や『能生町史』はとりたてて言及していないが、検地帳の記載様式が若干の手がかりとなる。『越後国頸城郡能生町御検地水帳』の翻刻は、各検地帳の地筆が田・畑・山畑の順で記載されていたことを示しており、特に検地帳が複数冊に分かれる場合には、この三部構成が各冊にも反映されていた。例えば8冊からなる木浦村検地帳では、田(第1冊)、畑(と屋舗・雑木林、第2~3冊)、山畑(第4~7冊)、集計(第8冊)のように構成されていた(能生町史編さん委員会編1986a:1-145)。このように後尾に山畑を区分して記載するやり方は、焼畑を捕捉した検地帳にしばしばみられるもので、一般の畑と焼畑とを明確に区分する意図があったことを考えさせる。

一方、上記の例のように、「山畑」の名請けは他の田畑と同様に、個人の名請けが一般的

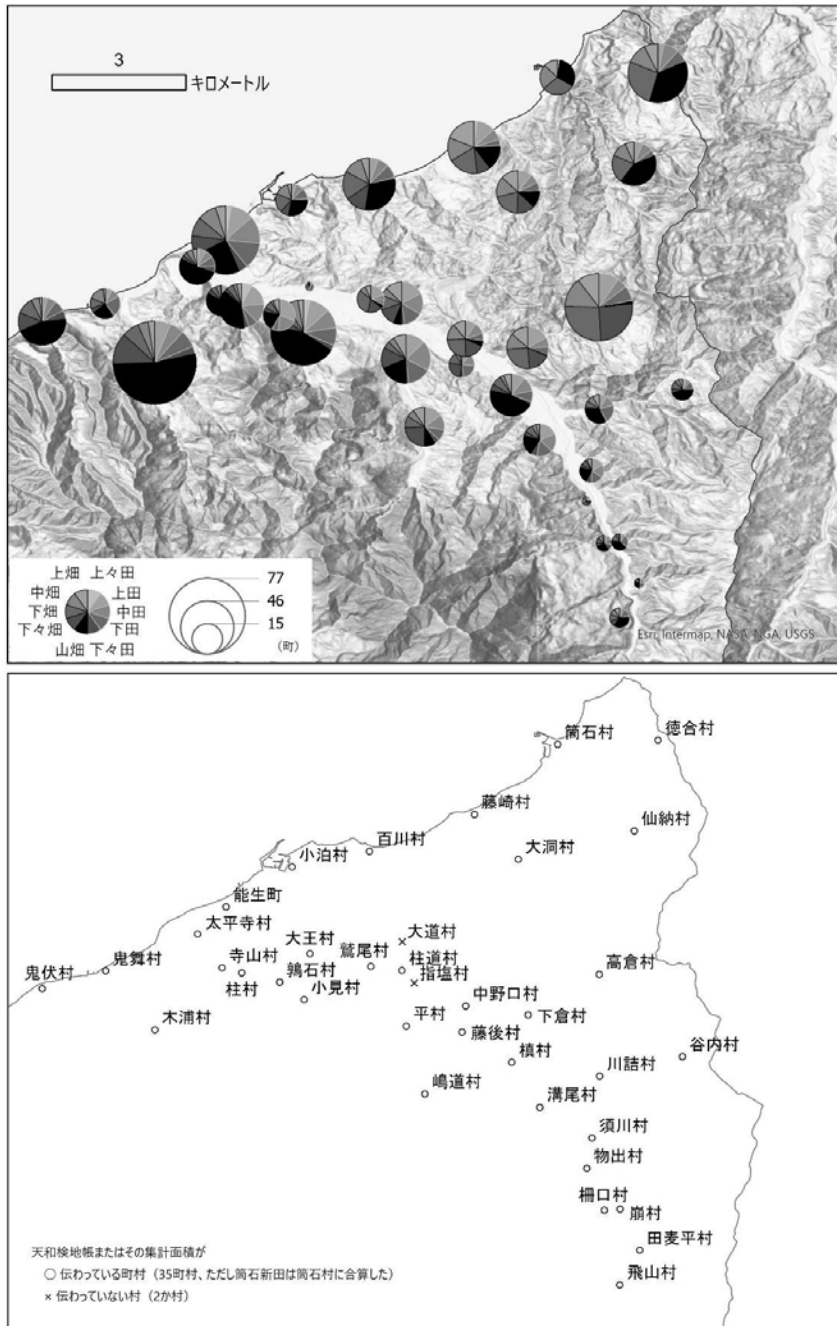


図2 天和検地にみる村ごとの耕地面積 (1682年)

上図は耕地面積を、下図は町村名を示す。いずれも実線は現糸魚川市域を示す。除地や寺社領は含まない。筒石新田は筒石村に合算した。『越後国頸城郡能生町御検地水帳』(能生町史編さん委員会編 1982, 1983a, 1983b, 1983c, 1984a, 1984b, 1986a)と ArcGIS Pro により筆者作成。

であり、山野の共同体的な管理が「山畑」記載に反映されていたようにはみえない。天和検地の直前、1681（天和元）年に大王村の村民が「山畑老枚 名槇山也」を売買した証文が知られる（能生町史編さん委員会編 1986b：上巻 323）。山畑は天和以前に検地されていなかったと考えられるが、村民の間では山畑の個人所持が認められていたとみえる。このことは、天和検地帳に雑木林が個人の名請で記載されていることとも軌を一にしており、山野の個人所持がある程度進行していたことが、天和検地における広大な「山畑」検地を促したようにも考えられる。

以上より、天和検地の「山畑」が焼畑であったと即断するのは難しいものの、20世紀半ばまで焼畑（あるいは切替畑）が営まれていたことを踏まえれば、そこに焼畑的な土地利用が含まれていた可能性は小さくないと考えられる。

4. 柵口村天和検地帳にみる「山畑」

ここまでの検討を踏まえて、旧能生町でも南部の山間に位置する柵口（ませぐち）村を例として、検地帳（能生町史編さん委員会編 1983a：79-89）が示す「山畑」の景観について吟味しよう。柵口村は、図3に示すように糸魚川市東南部の権現岳（標高1101m）の東南

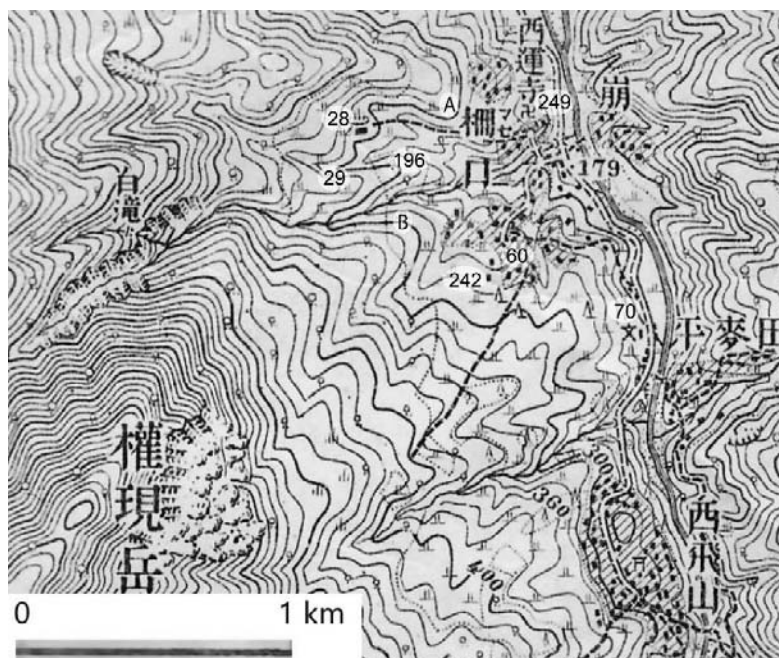


図3 柵口村天和検地帳にみる小地名の位置比定

28 ゆのもと、29 うしまき、70 てうなふり、196 大そうれ、247 いけはら。そうれ地名：A 片ぞうれ、B 小梅ぞうれ。位置比定は「地辻り前の柵口周辺図」（上能生郷土誌編集委員会 2018）を参照し、028「ゆのもと」は柵口温泉源に、029「うしまき」は牛牧に、060「よこみち」は横道に、070「てうなふり」はちょうなぶりに、196「大そうれ」は大ぞうれに、242「いけはら」は池の原に、249「はけ」は屋号はげに、それぞれ比定した。ベースマップは1911年測図5万分1地形図「高田西部」。

山麓に広がり、たびたび雪崩や地這りに被災してきたことでも知られる。上述した明治期の「切替畑」11 町を記録する田麦平村の隣村でもあり、当地の郷土史研究の成果である『霊峰権現の郷 上能生の今昔』（上能生郷土誌編集委員会 2018）を通じて、幾つかの手がかりを得ることができたため、注目したい。

表 1 に柵口村天和検地帳が記載する地筆を小地名ごとに集計して示した。地筆は田・畑・山畑・屋舗の順に区分して記載されており、それぞれおおむね北から南へと記載されているように見える。「山畑」は「坂本」（181 筆目）から「大小」（246 筆目）にかけて 66 筆が記載され、その位置には二つの特徴があった。一つは表 1 の「坂本」（表 1 中 181）から「いけはら」（242）にかけての地筆であり、位置比定できた「大そうれ」（図 3 中 196）や「い

表 1 小地名ごとにみた柵口村の屋舗・耕地面積（単位：畝・歩）

小地名	屋舗	田	畑	山畑	小地名	屋舗	田	畑	山畑
1 川入		5.10	4.03	6.20	106 うしろ			0.00	
5 川端		2.05	13.29		107 さいの神			2.24	
8 下倉		33.11		0.28	108 大くほ	1.18		0.00	
13 は、		3.02	2.13		110 川平			0.12	
14 山本		2.10	2.06		111 谷平			1.16	
15 かみのうしろ		0.00			118 はして			2.24	
16 たのわき		0.18	0.04		119 中坂			2.24	
17 たのまへ		0.08			128 宮のわき			15.25	1.14
18 なかくぼ	1.24	0.08	1.26		146 糸のき嶋			0.12	
19 家前		0.28	3.01		148 やそり坂			8.12	
20 下倉平		0.24		0.16	154 宮のまへ			6.09	
21 ほうのき			0.03		167 いなは			1.12	0.20
23 山田		33.20			168 下大小			5.02	15.13
26 なかて		12.24		0.06	175 下は、			0.20	
28 ゆのもと		2.15		1.02	181 坂本				0.18
29 うしまき		0.20			184 ふしき谷				0.15
34 せり田		0.90			196 大そうれ				0.12
36 上川原		8.18			197 かわの上				0.15
38 いわたな		1.10			198 川はら				6.06
43 道下		5.28			208 せりはた				4.00
50 道上		25.26		4.09	209 田の平				4.24
60 よこみち	2.01	7.09	8.12	18.06	212 坂下				0.03
67 たにはた	2.18	1.01		18.13	214 家のうしろ				0.15
68 大小	0.26	0.28		6.20	218 平はた				3.17
69 かわらて		1.26			222 宮の上				1.26
70 てうなふり		12.21			225 上大小				1.06
74 うしまき口		2.06			233 川原上				1.24
75 さかぐち		3.17	5.10	2.13	242 いけはら				5.24
78 宮の下			37.25	4.06	247 中のね	2.00			
97 家のわき			1.14	0.08	248 かみ	3.24			
102 みね			2.12		249 はけ	3.14			
103 山坂			1.07	0.03	総計	18.05	175.00	134.25	112.18

小地名の番号は初出地筆が検地帳の何筆目にあたるかを示す。ゴシックの小地名は位置比定を図 3 に示した。除地（五社権現領，白山権現領，西運寺領）および永荒は本表には含まれていない。能生町史編さん委員会編（1983a）にもとづき筆者作成。

けはら」（同 242）のように、集落からみて西側の山腹に位置する広がる。とりわけ先に例示した地筆の小地名「大そうれ」は、焼畑地を意味する民俗語彙ソウレに由来するとみられ、興味深い。検地帳には記載がないものの、ほかにも小地名「片ぞうれ」と「小梅ぞうれ」が集落の西側背後（図 3 参照、明治期には棚田が広がる）にみられ、かつてはこうした山野が焼畑の場であったことを示唆している。関連して、1745（延享 2）年に柵口村が権現岳北麓で隣接する・溝尾村との間で山論絵図を作成しているが、その争論の対象の一つが「ちご作り荒し畑」であったという（上能生郷土誌編集委員会 2018：101）。「荒し畑」は焼畑ないしその休閑地を意味する可能性があり、その帰属が問題になったことがしられる。

一方、表 1 は田が存在する小地名の一部には「山畑」も併存していたことを示している。「川入」（表 1 中 1）、「道上」（同 50）、「よこみち」（同 60）、「たにはた」（同 67）、「大小」（同 68）は比較的「山畑」面積が大きく、しかも「よこみち」、「たにはた」、「大小」には屋敷も所在していた。図 3 に比定した「よこみち」（図 3 中 60）からわかるように、集落や水田のすぐそばでも「山畑」が営まれていたことがわかる。こうした特徴は、この柵口村の景観が典型的な焼畑山村といえるようなものではなく、むしろ棚田を軸としつつ、そのすぐそばで休閑が頻繁になされるような焼畑的な土地利用が併存していたことを示している。

なお、名請人ごとに所持地を集計した表 2 は、所持地の少ない百姓に「山畑」所持がかたよっていたのではなく、むしろ屋敷と一定の田畑をもつ百姓が「山畑」も保持していたことを示している。このことは、水田と畑作に加え、焼畑的な土地利用も組み合わせることが、この村落の百姓にとって望ましいあり方であったことを示唆している。ただし図 3 は、それらの多くが明治期までに水田に転換したであろうことことを、そして村落の規模も大きくなっていったことを暗示している。

表 2 名請人ごとにみた柵口村の屋敷・耕地面積（単位：畝・歩）

名請人	屋敷	田	畑	山畑	総計	名請人	屋敷	田	畑	山畑	総計
次郎左衛門	2.12	34.21	32.12	6.27	76.12	庄右衛門		1.08	3.06	2.10	6.24
次郎右衛門	3.14	24.07	21.09	16.09	65.09	孫左衛門	1.18	2.10	2.00		5.28
長兵衛	2.00	21.25	6.05	17.00	47.00	庄左衛門				4.24	4.24
清左衛門	3.00	18.12	13.18	10.29	45.29	六郎兵衛		0.24		3.01	3.25
治右衛門		16.19	15.03	8.08	40.00	五右衛門 3				3.15	3.15
西雲寺 1		13.17	8.25		22.12	権三郎	1.12		0.16	0.14	2.12
治兵衛		3.03	1.19	15.26	20.18	次兵衛	1.10			1.00	2.10
次右衛門	1.12		5.24	10.26	18.02	吉三郎			1.13		1.12
丹後 2		12.21	5.00		17.21	甚兵衛			0.24		0.24
武兵衛 3		4.29	12.06	0.09	17.14	八兵衛			0.24		0.24
長左衛門	0.26	0.28		10.18	12.12	惣吉	0.21				0.21
六右衛門 3		7.24	3.20	0.12	11.26	権九郎			0.12		0.12
村中 4		11.22			11.22	総計	18.05	175.00	134.25	112.18	440.18

名請人の肩書き 1 浄土真宗、2 社人、3 能生町、4 庄屋給。治右衛門と次右衛門。除地（五社権現領、白山権現領、西運寺領）および永荒は本表には含まれていない。能生町史編さん委員会編（1983a）にもとづき筆者作成。

5. おわりに

以上、本研究では、糸魚川市域の天和検地における「山畑」について、初歩的な分析を行った。検地条目における位置づけや検地帳の構成からみれば、「山畑」に焼畑が含まれていた可能性は小さくないと考えられるが、検地帳の記載から即断するのは難しい。ただし柵口村の検討からは、田畑の周囲に焼畑が併存する山間村落の景観を想定することができた。

当地域では焼畑が20世紀半ばまでにみられたものの、現在ではその「記憶」はほぼ失われているといっておく、歴史的な検討に際してもあまり注意を払われてこなかったように思われる。「山畑」をめぐる争論や売買に関わって、より内実を示唆する史料が得られるならば、さらに検討を深めることができると思われる。後考を待ちたい。

資料の探索に際し、ご助言・ご配慮をくださった糸魚川市民図書館と能生図書館に、お礼申し上げます。

文献

- 糸魚川市役所編 (1977). 『糸魚川市史2 近世1』糸魚川市役所.
- 糸魚川市役所編 (1986). 『糸魚川市史資料集1 文書編』糸魚川市役所.
- 糸魚川市役所編 (1987). 『糸魚川市史資料集2 文書編・民俗編』糸魚川市役所.
- 上能生郷土誌編集委員会 (2018). 『霊峰権現の郷 上能生の今昔』上能生郷土誌編集委員会.
- 米家泰作 (2019). 『森と火の環境史—近世・近代日本の焼畑と植生—』思文閣出版.
- 米家泰作 (2022). 焼畑から見た日本. 月刊みんぱく 46 (2), 8-9.
- 佐々木高明 (1972). 『日本の焼畑—その地域的比較研究—』古今書院.
- 成城大学民俗学研究会 (1980). 『新潟県西頸城郡能生町大字仙納民俗調査報告書』成城大学民俗調査報告書 6.
- 新潟県編 (1981). 『新潟県史資料編6 近世1 上越編』新潟県.
- 新潟県編 (1987). 『新潟県史通史編3 近世1』新潟県.
- 能生町史編さん委員会編 (1982). 『越後国頸城郡能生町御検地水帳』能生町教育委員会.
- 能生町史編さん委員会編 (1983a). 『越後国頸城郡能生町御検地水帳2』能生町教育委員会.
- 能生町史編さん委員会編 (1983b). 『越後国頸城郡能生町御検地水帳3』能生町教育委員会.
- 能生町史編さん委員会編 (1983c). 『越後国頸城郡能生町御検地水帳4』能生町教育委員会.
- 能生町史編さん委員会編 (1984a). 『越後国頸城郡能生町御検地水帳5』能生町教育委員会.
- 能生町史編さん委員会編 (1984b). 『越後国頸城郡能生町御検地水帳6』能生町教育委員会.
- 能生町史編さん委員会編 (1986a). 『越後国頸城郡能生町御検地水帳7』能生町教育委員会.
- 能生町史編さん委員会編 (1986b). 『能生町史 上巻下巻』能生町役場.
- 農林省統計調査部 (1955). 『1950年世界農業センサス市町村別統計表』農林省統計調査部.
- 松永靖夫 (1980). 越後の天和検地と農村構造の展開. 史林 63 (1), 106-143.